キズナエピソード

袖城 セイラ　4話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//背景：黒

デートの回数を重ねると共に、帰りにどちらかの家へ寄ることも増えていった。

俺とセイラの仲はゆっくり、

そしてしっかり、育まれていった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//帰り道・外

［友人］

「いや、ズルいだろ。ズールーいー！

お前だけ、あんな綺麗な先輩と付き合いやがって！」

［とびお］

「はいはい。悔しかったら、お前も素敵な出会いしろ」

［とびお］

その日は久しぶりに友人と帰っていた。

［友人］

「じゃあ、合コン企画してくれよ！

セイラさんの知り合いならさ、

きっと綺麗な人ばかりなんだろうなぁ……」

［とびお］

「やだよ、めんどくさい」

［友人］

「あ、てめぇ！　彼女と友達、どっちが大事だ！？」

［とびお］

「彼女」

［友人］

「ひどい！

俺との関係は遊びだったんだな！」

［とびお］

「……ちなみに、お前が彼女いたとしたら、

俺と彼女どっち選ぶ？」

［友人］

「彼女」

［とびお］

「まぁ、そういうと思った」

［友人］

「あー、すっごい美人いないかなー

……あ、見つけた！　すっごい美人！

っていうか、お前の彼女じゃん」

［とびお］

言われて目を向けると、道路を挟んで向こう側で

セイラが歩いているのが見えた。

［とびお］

「じゃ、お前とはここまでだ。

俺はここからはセイラと一緒に帰るんで」

［友人］

「なんだと、バカとびおー！

馬に蹴られて死んじまえー！」

［とびお］

馬に蹴られて死ぬとしたら、

人の恋路を邪魔するお前の方なのだが。

［とびお］

「おーい、セイラー！」

［とびお］

俺は青信号を待ってから、

セイラのもとへと駆け出していく。

［友人］

「危ない！」

［とびお］

「え？」

［とびお］

声が聞こえた。

次の瞬間、横から車がやって来るのが見えた。

なんで？　青信号なのに……。

［とびお］

周囲がスローモーションになっていく。

フロントガラスの向こうに運転手の姿が見える。

居眠りをしていて、こちらに気づいてはいなかった。

［とびお］

やばい、どうする。

いや、どうにもできないか。

［とびお］

セイラを見ると、彼女は青ざめていた。

俺はせめて、彼女が不安にならないように笑顔を――

［とびお］

けたたましいブレーキ音が、周囲に鳴り響いた。

//暗転

［とびお］

気付くと、俺は倒れていた。

体を動かそうとするが、重くて動かない。

［とびお］

それもそのはずで、

俺の体は友人によって取り押さえられていた。

［友人］

「おい、大丈夫かよとびお。

俺は馬に蹴られて死ねとは言ったが、

車に轢かれて死ねとは言ってねーぞ」

［とびお］

「お前が、助けてくれたのか……？」

［友人］

「へへっ。あいにく俺は今彼女がいなくてな。

繰り上がりで一番大事なのが友達なんだよ」

［とびお］

「……ありがとう」

［友人］

「それより、大丈夫なら、

彼女のところに行ってやれよ」

［とびお］

言われて見てみると、

セイラは青ざめた顔で歩道にへたり込み、

大声をあげて泣いていた。

［とびお］

俺はセイラのそばに駆け寄り、彼女を立たせてやる。

［とびお］

「セイラ、大丈夫。

俺は大丈夫だぞ。」

［とびお］

声をかけるものの、セイラは取り乱していて要領を得ない。

ひとまず落ち着かせようとするが、

背中をさすろうとした手は振り払われてしまった。

［セイラ］

「もう、いや……

やっぱりダメ……。私、怖い……！」

［とびお］

そしてセイラは俺のもとから走り去っていった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//4話END